様式２

令和5年度　調布市立富士見台小学校　学校評価報告書（学校長　小俣弘子）

学校の教育目標
ふ深く考える子（知識や技能を身に付け，それらを活用し，問題の解決に向けて追究することができる児童） じ自他を愛する子（自他を尊重し，認め合いながら協力して行動することができる児童）　み自ら鍛える子（自分のめあてを自覚して，工夫しながら粘り強く取り組むことができる児童）
目指す学校像(ビジョン）　例）学校像，教員像，児童・生徒像
・子どもの可能性を伸ばし，一人一人が輝く学校（自己肯定感・自己有用感の醸成）　「自分のよさを育てよう！　友達のよさを伝え合おう！」 ・子どもの心と言葉を育てる学校　「相手を大切にした　あいさつをしよう」

調布市立学校における共通した領域　＜短期的な経営目標＞

	1　豊かな心(徳)		2　確かな学力(知)		3　健やかな体(体)	
	(1)　具体的な取組	評価	(1)　具体的な取組	評価	(1)　具体的な取組	評価
自己評価	①　「学習＆生活のルール」を全校で共有し，規律の定着を図ることで安心できる生活環境を整える。また，いじめに関する授業の実施及び研修を通して，教員の指導力向上を図り，児童の自己理解・他者理解を深めていく。	B	①自ら課題をもち，主体的，対話的に考え，問題解決できる児童を育成するために，授業改善を積極的に行う。【タブレット端末の利活用，ユニバーサルデザインの視点（ハンドサイン等），少人数指導等】	A	①安全面（食・災害・交通・生活等）において，児童には，正しい知識を身に付けさせるとともに，教職員全員の危機管理意識を高度に保つ。教職員全体で，元保護者による講話及び年３回の食物アレルギー研修とシミュレーション訓練の実施を通して，対応マニュアルの周知徹底と確実な実施を行う。	A
	②自他共に大切にする児童を育成するために，人権尊重の精神に基づき，多様性を認める授業を実践し，誰に対しても相手を大切にする思いをもち，あいさつなどの言葉遣いや行動に表すことができるようにする。	B	②自分のよさや可能性を伸ばすために自らを鍛え努力を積み重ねると同時に，一人一人の頑張りを周りの人が認め，褒め，励ますことで自分に自信をもち，自己肯定感や自己有用感を高めるようにする。	B	②体力向上を図る取組（年間２回以上）や運動会を工夫して実践し，運動の楽しさを味わわせる。また，体力テストを通じて課題を見つけ，改善に向けて取り組むようにする。	B
	(2)　成果（数値目標に対して）	評価	(2)　成果（数値目標に対して）	評価	(2)　成果（数値目標に対して）	評価
	①　学校評価アンケート(児童・保護者)において「基本的生活習慣」の項目に対する肯定的な回答 目標９０％　結果８２％	C	①　学校評価アンケートにおいて,「学力定着」（児童・保護者） 目標 90％　結果８９％ 「少人数指導」目標８２％　結果８４％	A	①　・食物アレルギー事故及びヒヤリハット事例　目標ゼロ　結果ゼロ ・学校評価アンケート（児童・保護者・教員）「安全・安心」の項目に対して肯定的評価 目標９０％　結果９３％	A
	②学校評価アンケート（児童・保護者）において学校が楽しいと肯定的な回答 目標９５％　結果８９％	B	②「自己肯定感・自己有用感」の項目に対する肯定的評価 目標８５％　結果８０．５％	B	②学校評価アンケート(児童・保護者)において，健康教育の項目への肯定的な回答 目標９０％　結果８９％	B
学校関係者評価	多くの児童は生活のルールを守っているが、一部の児童が守れていないと自己評価している。学校全体、各学級での学校のルールの確認、生活や学習規律の指導の定着を重点的に図っていくことが今後の課題である。何のためにこのルールを守るのかを考える機会を設けるとともに、ルールやマナーについての意識の向上を図っていく必要がある。 学級が安心した居場所、友達との絆づくりの場所となるように互い認め合える雰囲気を大切にしていじめにつながる言葉や行動を軽微なうちから丁寧に対応し徹底してなくす指導を行うことが大事である。		学校の校内研究では、学びのユニバーサルデザインの視点を取り入れ、どの子も主体的に取り組めるよう指導法や支援の仕方　の研究に取り組んだ成果が出ている。発問の仕方、分かりやすい板書の書き方、教材教具の工夫、見通しのもてる授業展開など様々な工夫を取り入れることで児童の「分かる・できる」につなげてきたことの成果である。 授業の中で考えたことや発言したことを教員や児童が認めたり、励ましたりすることで自己肯定感が高まり、自分に自信をもつことができたと思う。今後も継続してほしい。		安全面では、自ら判断して身を守る行動が取れる児童に育てていくことを取り組んだ成果である。また、今年度保護者の方に「災害時対応マニュアル」を配布いたしたことも安全への推進につながった。 食物アレルギーに関する対応においても引き続き研修を重ね、注意を払って進めてもらいたい。体力向上に関する取組も長縄など取り組んできたことと、休み時間の外遊びの推進を引き続き行ってもらいたい。	

学校の特色を生かした領域　＜短期的な経営目標＞

	4　言語能力･情報活用能力の向上		5　特別支援教育		6　地域との連携	
	(1)　具体的な取組	評価	(1)　具体的な取組	評価	(1)　具体的な取組	評価
自己評価	①　考えを言語化するための「伝え方ワード」を実態に応じて具体的に指導し，協働的な学びの充実を図る。また，iPad を活用し，必要な情報を集め判断する活動を通して，言語能力・情報活用能力の向上を図る。	A	①　計画に沿った特別支援学級児童と通常の学級児童との交流・共同学習を進め，多様性尊重への理解促進を図る。また個別最適化した支援や環境を提供できるよう相談体制の充実も図る。	A	①「地域学校協働本部」の活動を更に充実させ，「放課後学習教室」や「漢字検定」，外部人材の活用等の取組を児童の学習意欲向上につなげていく。	A
	②年間 2 回の読書月間を中心に読書活動を推進するとともに，日常的な言葉遣いの指導等を通して，言語感覚を養い，豊かな言葉の獲得を目指す。	B	②特別支援教室での指導が，在籍学級での指導・支援に活かされるよう，専門員やコーディネーターを窓口として円滑な連携が図られるようにする。	B	②学校だよりやホームページ，クラスルーム，保護者会等を通じて学校情報を共有し，共に同じ方向を向いて児童を育てる意識を高める。	A
	(2)　成果（数値目標に対して）	評価	(2)　成果（数値目標に対して）	評価	(2)　成果（数値目標に対して）	評価
	①　学校評価アンケート（児童・保護者）において,「言語活動」及び「ICT 機器の活用」	A	①　学校評価アンケート(児童･保護者)において　「自他を愛する」の項目に対する肯定	A	①　学校評価アンケートにおいて,「地域学校協働本部」（児童・保護者）への肯定	A

	項目への肯定的な回答 目標８５％　結果:言語活動８５％ ICT９３％		的な回答　目標　９０％　結果９０％		的な回答　目標８５％ 結果　児童９２％　保護者８６％ 保護者の「分からない」への回答 目標１３％以下　結果　１２％	
	②②学校評価アンケート（児童・保護者）において,「読書活動」項目への肯定的な回答 目標　８８％　結果　８０％	C	②学校評価アンケート（児童・保護者）において,「特別支援教育　相談する」項目への肯定的な回答目標８０％ 結果　児童　９１％　保護者　７１％	B	②学校評価アンケート(児童・保護者)において　「情報発信」の項目に対する肯定的な回答　目標　８５％　結果　９５％	A
学校関係者評価	主体的で対話的な授業展開、自分の考えを表現する機会の設定が授業の中で定着してきた成果である。 今後も自ら考え、表現する力を今後も継続していく。 毎週の読書タイム、地域の方による読み聞かせ、読書月間の取組などの取組は良い。しかしながら児童の CD評価が１５％程度いることから、個別に読書の状況を把握することと、読書が苦手な児童にも読書の楽しさを伝える取組を工夫する必要がある。今後も読書を推進してもらいたい。		自他ともに大切にする取り組みとして ・相手を大切にしたあいさつ　・授業や生活の中での認め合い　・たてわり班活動などの異学年交流・かしわ学級との交流　・道徳等を通じての人権教育（障害者 高齢者 ＬＧＢＴ等）・いじめ、差別、偏見を許さない心の育成の取組での成果である。 相談については、保護者が分からないという方が多いことが分かった。早速、３学期から周知行うようにしたことはよいと思う。今後も相談窓口の周知を行ってほしい。		地域学校協働本部の取組は、毎日の支援員の派遣，放課後学習，漢字検定，ゲストティーチャーの派遣等、日々の学校教育を支えてもらっている。保護者の方の「分からない」の評価が昨年度に比べて減り、地域学校協働本部の様々な取組が広まったことは成果である。 各学級等によるクラスルームでの連絡、画像や動画等の情報発信、学校ホームページ、学校便り、安心・安全メールの充実も行ったことが成果につながっている。	

人材育成･組織運営

自己評価	・主幹教諭をリーダーとして主任教諭の能力を生かした OJT の充実（月１回）を図る。（若手教員の育成，授業力の向上） →主任教諭が育成者として自分の専門性を生かしたＯＪＴを行うことができた。若手教員の育成ができたことと、主任教諭の育成意欲につながったことが成果である。日常的なＯＪＴについて引き続き意識を高めて行うことが今後の課題である。 ・組織の一員として，担当の分掌に責任をもち，前年度踏襲に終わらず，校務改善に向けて改善案を提案する。 →自分の分掌において、児童の実態や現代の課題に応じて改善することができた。特にコロナ後の行事の開催方法など議論し、よい方向に向けて取り組むことができたことは成果である。 ・教員が健康で溌溂と児童の教育に邁進できるように，ライフワークバランスを推進する。（在校時間の管理（月平均 45 時間以下７０％）メンタルヘルス全員面接　） →在校時間は、70%以上となり、働き方改革を進めることができた。夏季休業中に都のカウンセラーによる全員面接を行うことによって教員のメンタルヘルスにつながった。
学校関係者評価	授業観察時には、どの先生も元気に授業をしている様子を見ることができた。ＯＪＴなど日頃から育成が図られているので、若手の先生も授業力向上を目指して取り組み応援していきたい。 組織運営として、教職員で協力して取り組んでいると思う。今年度は、保護者の方にもボランティアとして入ってもらう取り組みを新たに取り入れたことは改善だと思った。保護者に支援が必要な状況を伝え、協力を得たことも新しい取り組みであった。

中期的な経営目標の達成状況

1　自己指導能力を高め，自他を尊重し，認め合いながら自律した言動がとれる児童を育成する。
→「自他を認める」児童９０％と、様々な取組により人権感覚の醸成が図られた。今後も児童の実態や現代社会の課題に応じて人権感覚の醸成に取り組んでいく。自己指導力として、基本的な生活習慣、学校のルールの徹底に一部の児童に課題が見られた。児童自ら善悪の判断、周りの人を思いやる言動を行えるよう日常的な発達支持的生活指導と、道徳教育の充実を図っていることが継続した課題である。

2　主体的で対話的な学びを通して自ら問題を解決し，自分の可能性を伸ばしていく児童を育成する。（自己肯定感・自己有用感の向上）
→「自分にはよいところがある」の肯定的評価は８０％　「先生や友達に認められている」は、７７％であった。どちらも否定的な回答は少ないが「分からない」という回答が１０％以上あった。このことによる、児童一人一人によさを実感できる取組みを充実させる自己肯定感を高め自分に自信をもって次に挑戦できる児童を育てることを継続して取り組む必要がある。

3　健康保持・体力増進に努めるとともに，自分の命を大切にするための安全な生活ができる児童を育成する。
→「健康な体をつくろうとしている」８９％「安全な生活ができている」９３．５％と概ね達成できている状況である。しかし、安全な生活は日常生活の大前提であることから継続した課題として取り組んでいく。更に来年度は、安全教育を研究テーマとして取組み、生活安全だけでなく、交通、災害安全、生命（いのち）の安全教育にも力を入れ、児童自ら危険を予測し、回避できる力の育成に取り組んでいく。

4　全ての基盤となる言語能力と情報活用能力の向上を目指し，言語環境を整えるとともに読書活動の推進や対話的な学びの充実を図る。
→「言葉や文字で伝えたり、話し合ったりできている」８５％「よく本を読んでいる」８０％であった。読書活動については、昨年度より肯定的評価が下がっているので、児童の実態を捉え、読書を日常から取り入れたり、学級での読書タイムを充実等を図ったりしながら文字を読み、読書を楽しむ習慣を身に付けることが今後の課題である。

5　通常の学級・特別支援学級・特別支援教室等の組織的連携を図りながら，個別最適化した特別支援教育を推進していく。
→特別支援コーディネーターが担任や通級指導教室の教員と連携を図り、児童の実態を保護者と共有しながら通級指導や個別指導等につなげることができたことは成果である。保護者の評価で相談の仕方が分からないとの意見があったので、カウンセラーの活用方法や、担任を始めどの教員でもいつでも相談できる周知と雰囲気を大切にしていく。

6　保護者・地域と連携し，学校情報を共有し共に児童を育てる意識の向上を図るとともに，CS へ向けた理解促進に努める。
→「地域学校協働本部の活動」保護者８６％「学校の情報共有」保護者９５％と今年度の取組により成果が上がった。令和 7 年度からのＣＳに向けて学校経営方針を共有し、方針に向かって共に取り組んでいただく組織として理解いただき、編成していくことが課題である。

人・組　職層に応じた自身の役割を自覚し、学校経営方針を実現させるための取組を工夫しながら取り組むことができる組織。
→教職員の自己申告や面談を通じて学校経営方針に即した目標を設定し、目標達成に向けて具他的に取り組んだことは成果である。今後も、職層に応じた役割を自覚し、組織として学校改善に取り組んでいけるようチーム力を高めていく。

次年度の重点課題

「自己肯定感・自己有用感を高め、自分に自信をもつ」　「自分も相手も大切にする言葉や行動をする」
「言語能力・情報活用能力の向上」（特に読書活動）